



ル 4
5058



薩摩國

名所考

一

2602

唐禮名勝考序
我邦神靈在統一姓以傳德疆故率土之濱靡不在
臣四海之民咸神廟之後此百國所無而唯我
禮方有莫是不宜不知也夫古之神聖德流表而
所以利乎今戶而祝之仕而務之者凡古之有功於
民者身人所自出之遠祖而朝廷祀典所設名神大社
莫不與焉者乃吾藩藩內固不為大矣世亦以為古
宜斯西鄰有燕不之謂哉曰景時
郡馬其宮城址墟陵廟城奉皆在
唐宣宗所不詳也
帝皇山陵或在方策未嘗有
近者以世供其禮其禮之失
大祀也

禮名勝考

禮名勝考

v 57261



廣藩名勝考小序

我邦神聖立統一姓以傳無疆故率土之濱靡不在厥
 臣四海之民咸神明之後此乃國所無而唯我 皇朝
 獨為有焉是不宜不知也夫古之神聖德海表廟享百
 世以列于今尸而祝之社而禡之者凡古之有功烈於
 民吾人所自出之遠祖而朝廷祀典所秩名神大社
 莫不與焉者乃吾藩內固不為少矣世稱以為古國
 豈斯西鄙有喬不之謂哉曷時 皇孫降臨于茲尋以
 都焉其宮域地墟陵廟城域參皆在于中而不如夫
 唐虞葬所或不詳哉 帝皇山陵載在方策未嘗有變
 遷者以世供其祀莫廢其禮之矣蓋又吾 太祖賜土
 三列 源公所存遺種良有以哉山川之美帶礪之固

陳侯氏曰

襲封五百有余歲終與艱難不虞實為西藩大鎮此雖
英主迭興保守社稷之所致抑又世禱古國者安知不
由 帝皇降跡肇基大業之靈地也猶如東陸列神聖
所都之墟世為雉伯所盤據其迹並存東西然則以岐
豐之地起二南之化其所歸不在平彼在于此蓋神奇
靈秀之氣所鍾天險成境鬼呵護其理自有天爲而非
人力者而吾藩中俗最爲淳朴近古豈非神聖之遺澤
也哉今夫 帝皇山陵有三焉曰可愛陵曰高屋陵曰
吾平陵但於可愛陵其跡在三所玄遠繆爾世人或不
認其真甚者指穎娃為可愛訛以傳訛偕欲湮晦不明
于世可嘆天且夫古今變態陵谷不常名山谷蹟之地
或曾為荆棘瓦礫之場曠代無所徵者固不能無遺憾

焉於是乎壬子之夏余嘗祀草山陵考以示諸同志庶
幾使四方知其訛謬而傳百分一端於後葉也不幸未
得伸志竊以慨焉今茲同志之士慇懃為請因再修旧
稿復補其遺漏又雜錄二三名所及南島志餘以備概
覽藩中勝蹟之一助也雖然至其美景妙區歷々右人
目則余之不學無識固非所可以吮毫抽思況於脫稟
不日苟出于倉卒乎伏竊博洽君子之是正已年恭以
古者 神祖皇帝發自此西列東征正帝誕於是焉恭
默思治竈靈賜弼元完蕩穰疆宇大同莫復偏黨然後
蓋于中國經營帝宅皇建有極厥廓王因乃整頓乾坤之
鴻業朝四方之邦以使知天子尊抑又復 日神之旧
都也盛矣乎而吾藩中則所謂 皇孫胤肇始大業

之遺墟而其鎮社稷福蒼生者豈亦淺鮮哉我人幸生
斯天統一禮之仁域推戴万世父母之國恩是宜以致
思者矣豈翊山川秀美云乎哉登眺遊觀云乎哉為是
序

寬政七年乙卯秋八月五日

鹿府 鼓川山人 謹識

一薩藩風土記今不傳唯曰史之漢人書者有之肥人編之
世に並り余千々をて未てを又大隅日向
よ於てハ風土記存之
朝野群載日延三太政官符五畿七道諸國司
綏内七道諸郡名暑政官符五畿七道諸國司
色州本禽獸魚貝等物具録色月及土地沃塔山川原
野名号所由又古不相傳土記始于一載于史藉言上
皇加翁日六十六國名風土記始于一載于史藉言上

醍醐 其郡村々名異表時販之沿革ありて南今頗
す々をの能一人の力りて校訂改訂すき所あり
ある一函史を檢數一傍釋史小説を深覽し具
昭授あるもの一二を擡卷する年國政は國
官事は傍りものけき毎侯裁あるは其其
行多あり
一通稱の名あるありて天朝祀典所秩名邪
大社、即名山水を回く發絶あるは又本
之浦を伴峰の名ありといえども世間史乘より
うぬぬのハ登授せり又古戰場故城蹟食貨物産
國多しといふれは鳩嶺古くより者あり又雨霧
あ樂の温河物たる政の滯布其他鹿府中の大郡
巨利の外は漢史佐本を鈔録して曰く其志の
字本一扇ありは篇は思あるあり
一所載多ク波濤接換を歴るものあり坊津の如き
之関日舟楫を極め足跡を府むたは較周意を
もの如し 然りとも思ふべきは 煙晦舟 祥しものハ

廣府八景 八景序跋あり 今畧之

多賀山風

天外唯聞度曲高 積翠起波濤冷然響入沒絃

山園夜雨 松園夜雨 鶴江雨度古神華表松間煙霧多夜 驚風吹不

絕或疑蒼石談飛時 磯山の晩潮 築地晩潮 一由清江淡水流晚來潮湧浸沙洲啼鴉盡長堤

上波面漫々月色浮 島陰渙火 十里島陰雨以烟松膏無數滅還笑晚來人去風波

起一點寒光照岸邊 松峯鐘聲 一朶松峯清淨奇景光入望 眼前宜暮鐘殷々使人

感今日又過十二時 山の名れまつの岩より吹ぬてゆくのりし子つら

松對遠連南浦濱青林綠水望清幽隔離塵俗乾坤

別思入神仙物外遊 羨世一人南をりも多しとふれみたりよつくをれ林々

洲寄平沙 江城風景盡因中松隔汀洲繞梵宮滿日平沙千里

色潮來潮去亦玲瓏 天際仰高標島峯藍光翠色躍青龜白雲變態多奇

異知雪知是現妙容 仙巖園十六景 仙巖園ハ廣府東一里許にあり喜宿

俗大磯假館と云ふ本府前一勝處と云其朝暉夕 陰氣幾千万ありの具一石状と云

夫天曰蒼天海曰碧海杖桑曜日若木舒萃斗柄乍看 其東指宇宙皆春地維不缺于西方山川並秀乃有薩

摩國者即日本之連疆也臨以碧津迎茲滄溟斜演折 木邊峙汰焦非藉巨靈之擘偏成海外名山乍當曦馭

之外便見日邊好景園惟瀕水即是瀛洲巖亦稱僊何

殊蓬島千里經遊北遇十六景勝地堪誇豈不足以
壯觀供眺覽也哉今者重洋穩渡新看輻輳之番船
官貨交易爭喚往來之唐客撫此地林泉新遠人耳目
增印壑於胸中盍風雲於筆下借荆關妙手繪出層巒
借顧陸奇才寫成尺幅於是搜問學士拓冊管以哦詩
選勝文人含霜毛而得句春風畫閣披圖瞻東海之雲
霞細雨曉牕捲筆揮西園之翰墨遂使王摩詰即画即
詩並傳其妙非君謝幼子一印一壑得昏其奇也爰製
序言以弁簡首

歲在著雍涿灘圍余月穀旦

尤春坊錢棨

鳴雨泉

戊申仲夏

外史曹

謙光

山脉通源日夜流淋似雨鄉園秋亭采石鼎供茶話

七椀邀盧一咲林

赤松林

雲南學政吳俊

虬枝低亞翠成堆未受秦封次才裁薄暮擁濤風影動
疑樽月判藩摩來

蟻蛟石

翰林庶常出知福寧刺史江琅

雲根拔地幾何年形肖蛟勝却宛然千古青蒼冠名勝
每逢風雨似昇天

香楓巖

經筵講官戶部尚書董誥

春風吹醉早楓丹夾岫香來到曲欄此景櫛餘海外有
神仙應羨是奇觀

脩竹徑

吏部右侍郎順天學政金士松

琅玕千萬立成林細路通人幽境深停午不知過赤日

清涼慣透愛吟心

番蕉印

翰林院條櫻汪如洋
培成翠碧帶山暎紫：迎風鳳毛控也抱歲寒心似鐵
不驚飛雪響蕭蕭

秋蒿叢

翰林院編修范來宗

歷亂秋風影不齋含烟和露隔花溪莫嫌寂寞蓬蒿運
慣遺高人遠托栖

葡萄架

翰林院編修加一級嚴福

漫使西歸味共探移栽嘉種遍東南結陰成架初添竹
珠帳艸龍護碧嵐

以上仙巖園中八景也

管神廟

御史李葵

巍然神宇白雲連
靈爽馮依別有天
洗淨塵緣綠田好景

楓香蕉色寺門前

櫻花溪

太守王文治

張家紅粉檀風回
天然到練洲
好賺漢郎成
同訊一溪春海東頭

竜洞院

承宣布政司王相

天平遙對院門青
四月冥生古樹林
噓氣成雲迷洞府
蒼苔冥漠鎖層陰

飛鳥道

大學士松璜

仄運垂空界碧山人
依飛鳥試躋攀
紅塵不到芒屨在
徐應松雲幾箇閑

朝夕池

主事顧宗泰

群峯環抱一泓秋水落水高早暮流正合仙園人跡足
果然身已到瀛洲

匹練洲

侍郎將元益

雲羅霧縠影相將疊雪輕白帶水鄉倚借白魚拋玉尺
量來必有幾多長

天平山

翰林院編修溧同

高峰儼與碧霄齊直聳立當空万象依絕頂徘徊天闕近
何須更上步雲梯

海門山

侍讀學士彭紹觀

海門兀峙鎖洪濤能抗前津風怒號一万里乘潮客出人
玉鯨隱々入金鼈

以上仙巖園外八景也

菜摘瀑布

夏見夏實等一名菜の流今云

未周孰是再考其流ハ大砥把橋の上の峽中ニ在リ

の流ハ又云ハありんといふなり

若菜流の上ハ松對あり倍ゆふに

都曇答臘一作韃韃一名鼓川而菜摘瀑布ノ流あり

又真小路云都曇答臘本外夷樂都曇似腰鼓而小答

臘即指鼓也又唐各礼志有都曇鼓云

紀通鑑ハ引て鼓ハ都曇也といふ

川即都曇川の轉あり

東亦答臘の音ハ通セリ又古者今の鞠を踏ハ

して樂の節奏をあらて踏ハ

樂といふは伊移のむハ樂工居せり

在の方吉野村ハ七社蓋祠あり

按の地ハ都曇の音曲人住居せり

と見ハ都曇答臘本外夷樂といふなり

命以伊尔色神为澄焉又以为祭神者未详盖五十
瓊敷彦采色于此因名焉又案伊敷乃西村以上下
神分社所在所係下伊敷村又上伊敷之字古或作
神食乃知是神戶之地也
府北一里四町

三代实録貞觀二年三月廿日薩摩国正六位上伊
尔色神授從五位下

○日置郡伊集院郷嶽村置比於木智賀尾神三代实録
尾奉祀 熊野本宮及新宮

府西四里半

三代实録貞觀二年三月廿日薩摩国從五位下智
賀尾神授從五位上

同郡串木野郷上各村カサキ又新陽の山巖洞あり其中は
土の自燃生の樹あり年々天に落ちて苗芽は
不絶信呼て獲我他邊古といふは物太古より有といふ

地も淡把姑の目ハ淡把姑より柏束の後の名なり天名
精也藪陀波古といふ由來ある

薩摩郡隈城郷宮里村志奈毛神社三代实録今志
奉祀 熊野本宮

府西十二里宮里村隈城より川を城

三代实録貞觀二年三月廿日薩摩国從五位下志
奈毛神授從五位下

同郡高江郷久見崎村久見崎文徳实録作挹前
泊子對せり下流に順て河景成る所の地也

府西十四里半

文徳实録仁寿三年七月丙辰張薩摩国孝女挹前
福依賣節三級終身旌表門閭依賣天性至孝父母
年耆老病着床無子唯有一女福依賣扶侍尤右嘗

苗代川 韓帰降の辭のり

補文録 元年壬辰歲大同秀吉公朝鮮を征伐せられたる時我先代美林公

忠恒公相朝之辭彼弁有一姓朱^鄭朴李羅燕善金^李黃張林^車

言の製を布せしむあり其他の三姓^疏陳^自沉^下崔^申あり今存

田安丸十有餘人を俘せられたる實文九年己酉の事^光久^公

伊集院苗代川、聚所せられたる^鹿屋^郷より^つつ^され^り今

今苗代川あるを分ちて又、鹿屋郷よりつつされり今

萬代川の戸口凡四百宗あり^男女^もも^一千^四百^餘人

ありとそ麻屋にハ戸口八十餘ありて^男女^凡四^百餘^人

ありとそ其より旧俗を改付し^陶器^を創^りし^生活^をいと

あるの事^寛政^を辰^冬十一月陽^後の日^ら繁^栄の^事

傍居りあるに

山陵固是同壇尊之陵也已宜以相可愛之山陵可
愛之端陵可可愛之川井陵者今俗畧可愛之地名而
呼之也今按古者帝皇之所葬或營三陵一乃藏至
帝他皆藏其轎車及服御凡百葬具三墓合而為某
墓者其內長九尺闊五尺其外城方九尋高五尋
遺詔曰吾營此丘墟不食之惟無施用白布有轎車
古葬地廣大之制可以見也至孝德始改其制廢
陵邑矣然則今此三陵固是同壇尊之陵也已矣余
親審其三陵地形今倍謂可愛之川井陵距中山陵
一里許其地卑濕狹隘非宜以藏玉體也蓋其藏眼
御物之陵耳
新田宮新多神記 神祇拾遺 和名抄云高城郡新多
山文新多山之上間石燈三百九十余飯 五所八
幡文一薩藩之大廟也
奉祀 瓊二杵尊也 天照大神右榜幡千千姬
也 又別殿 應仁天皇ホの天を崇む因
八幡の廟ありありと
相傳此地即皇孫所都之遺墟故郡名高城或作高

本蓋取諸高木神之名欽和名鈔云高城太加末
諸神記曰新田宮始不嘗廟殿鎮座薩廣國龜山
新田宮五大隅國正八幡宮此五社在遠國不便於
謂廣因 後拍原天皇大永年中一集之奉祀山塔
國小莊今上京極之北有五所八幡宮是也
昔者皇使をきり夏城ホのふれ一年北中
昭百度及及者より 又へり之影所花文
帳板百通形 杖卷の執印某のちを在り極
同郡同郷千歲川和漢名數の此云千老川 享保中
字塔形と流す那との界を新田之影のちを
のちを流すは薩廣國府一大小川あり
天後文國分るけを在り古薩廣國府也
船間島 千老川口に在り
十郎大夫祠 而船間島に在りお侍陪送 皇孫降臨之
皇孫送り之 船長あり 因留居 船間梅田事也
稱十席大夫先不祥或謂其相宮者文名後世混清

祭神といふ今新田之社の中よ世十帝太夫文祠を奉
ずる者アリ可知是復應昭晰矣惜乎神名之湮没不
京泊川向と久見訪といふ薩平郡之江編作強頭馬里

京泊八景

関屋夜炊

何人もしやそよと海らんまをさひりき夜まの灯火
灯をかりぬりて湊川流のまゆり夜めさひりき

洲崎群嶋

志の浪のまよふ海崎のし船きこまむれいのかのぬれは
志の浪のまよふ海崎のし船きこまむれいのかのぬれは

浦鏡晚鐘

浦鏡のあはれいとおそいて夕べはるまかぬひらりあり
浦鏡のあはれいとおそいて夕べはるまかぬひらりあり

吹上松風

吹上松風に到り淋し吹上此夜松風の夕ぐれめり
吹上松風に到り淋し吹上此夜松風の夕ぐれめり

唐漬汐木

唐漬汐木の音しりてまをさひりき夜まの灯火
唐漬汐木の音しりてまをさひりき夜まの灯火

浪の息のかき本をさよと海らんまをさひりき夜まの灯火
浪の息のかき本をさよと海らんまをさひりき夜まの灯火

西海行舟

西海の舟や舟舟よつと浪のまよふ海崎のし船きこまむれいのかのぬれは
西海の舟や舟舟よつと浪のまよふ海崎のし船きこまむれいのかのぬれは

甌島白雲

甌島の白雲ににりて村白雲れ絶ましかる自雲はを山
甌島の白雲ににりて村白雲れ絶ましかる自雲はを山

入江秋月

入江の秋月ににりて村白雲れ絶ましかる自雲はを山
入江の秋月ににりて村白雲れ絶ましかる自雲はを山

○出水郡出水郷平松村和名抄出水伊豆美
加紫久利神社延喜式 加紫久利地名蓋儲粟也

奉祀 天照太神 三女神住 府西二十五里

延喜式薩平国出水郡一座加紫久利

文徳実録仁寿元年六月戊午以薩平国加紫久利

ト云ふ山登山あり梅日本紀神切宮后欲擊熊籠島而自
樞宮迂于松峽宮時和風忽起御笠墮川放時人号
其処曰御笠也 又云云 蓋此地多ク 或云御笠
今之石内宮地系といふなり

同郡阿久根郷波留村延喜式驛傳二阿久根作莫林

母子島 能因歌秋 〇樂業古事記下 村名也

今之 雄島 俗伝りて大島と 雌島 稍よ俗よ 桑島亦批

府西十六里餘

子島 或云小島と云ふなり 波留村の西海に並列を海上一里と云ふなり又

波留村の南に錦濱と云ふ所あり五色の細石多し砂石

を好むもの十二色の小石は拾取多し

光 光瀬月輪の如き光西尺を扱と云く海上を飛ぶ

愛上主系を依記りて戸村大明神と稱す 光物の

浮城文伊勢の子風といふもの記しとるより一通あり

嘗 莫根村よりありり時色人の云く光瀬の光物む

より何ホく辨りありしをすれ只神皇の物と云

或理字宛の中なるを海老と云ふ事あり其精氣光

を飯し振りある耳と云ふ事あり大高ア悦て言ふ事

百人を傳し光瀬の海産を撃つ事ありしものも是れ

してそ穴貫を自償する事ありて此を官を連

よるの牧る事ハ行 其白使を藏く官又逾る事あり

を授人といふ事あり

同郡能因歌秋 名所府北九里半

同郡鶴田郷柏原村紫美神社 三代実録 今作紫美

奉祀 同熊野 府北十三里

三代実録貞觀八年四月七日 授薩戸国正六位上

紫美神從五位下

伊佐郡宮
城郷司野村

草墻島といふもの而をこけ岬人住居あり一箇所此
山石にて大小魚を養ふの要地ありけり新道よりを渡す
のれあり

唐船の麻のま似して物乃通る多火夫あるハ見こまこ
余嘗て習者の上を穴て喰貨するもの居之西津三太瀛
中波出浪漫とをを教するのこ遇状晴の日物道草垣
の二所彈丸と黒子の如きものを臨すすけり海船の送
は来するハ穴も胡蝶の毛も又戯と飛よ似たり観海の
徒勝けあまよこころハあきさるこ

吹上小松原

小松原村より西に備志小松原をあり西海より
海風砂を吹上てのつらり季積して大阜
とあり白雪の堆はゆるは松樹吹上の砂は埋て指のいん
るものさるはけの女のりよめらるといひ伊ふ

吹上の浪のさる砂は埋てむ本ふをれ小松原のさ
けの雪の上より吹ける時 御制歌
ありいまや筑い糸の海のもをまをふか方の浦流かるるを
一説ハ大隅郡祢波江の少女が宿夜の別もさるるを
ひよりぬハ家身をいこく年を床よりこけ別をり

けちをとア一石ての 内製まいふ未孰は

同郡同郷宮里村竹屋

日本記和名鈔 作鷹屋今俗徒
之 淳和名鈔の財とハ阿多郡

鷹屋大明神 奉祀

彦火火出見 火闌降 火

明命也

日本記曰時以竹刀截其兒購帶其所棄竹刀終成

竹林故号彼地曰竹屋今夜多尾の社あり西方より竹林

あり古を傳ふけあま古言比竹と櫛一迹ありけ地ハ三

皇子降誕の墟あり今櫻をこ言系又京家といふ

同郡

竹島 日本記 武備志日本考金浙兵制録日
五部山混者多 海東諸国記作高島因吞瑞作鷹

日本記曰 皇孫遠登竹島而臨賢国之形 孝徳

記曰薩テ之曲竹島之門是也今案竹島ハ今の竹島

一説を指すありハ黒島硫黄屋久木の教を以て鏡といふ

一本作形

と称す。又南の東海ハ下淡南海と大坊と云々港
中浦の海四十有餘より二十六尋なるに狭して入
をく産産して中廣一四考運り拍こ西一方と缺耳大
瀛ニ接あもしくも別一の儲海とある今遷所あるの
地と中島といふを亦港中海崎の如く其の方尾統ま
備は備は海歩東よ左よ右をを後山を名々少
尺ゆるると車之嶽といふ西峯天を挿てお環りし最華羅
列弊し若く盤曲冬善勢も最峻崎と云々なり花舟
て通はしとひま西順水漫しとて南よ出で出るの左
ハ略層も亦ありて涼りて赤崖白砂途に現と懸敷
幾千丈ををり松條を文一柱産道と云々なり先
産浦ををり佐陽ををりたよ町を細やといふ又一の奥
るる高は八細師奥私を廻らし唐網を提て魚を獲る
の要口ありハ細代といふも一更と標の標は海才
風を指しと云々く縹子島立神等ノ奇崎怪淵其石布
里列ス亦西石此立相双りのと双剣石といふ一六
彷彿してあ双剣を提りしと云々題双剣石一首
双劍雌雄石時生紫烟豊城何用問都在海西天

峯頂より一里許坊し御嶽といふ即之後テの極嶺大
東の西際より一里の海回流をの秀た戸嶺と觸り隈
能て替怒して影休といふ泊浦勝りて味を春とい
を物とのと云々いふと冷し又極端の山岩千倒よす
月洞孔大サニ丈餘東よ透明を是極端の水
表り此のてと云々いふと妙体殊絶人工及へり
更りあやといふも一亦西南二十四里の津余
北よ之十五里の南濃坊津の属島と又云々
沖立神と海産より立立の大石あり振あり二十
石許さ五十九石餘を家ハ海島の多ありと云々
こといふと云々西ハ五里産東古兵城の地津江津
か尤瀬割れ三百多石の内外と云々云々
云々の接割かきり波の波も一ツと云々
云々云々の接割かきり波の波も一ツと云々
日本と支那の界といふと云々以下
如意珠山一葉院西海金剛峯寺 是 後天
後天天皇 西皇上の勅額淨場之西白王 此

聖躬并み 宗業短し指亦多し又中乃娘の成しといふ曼
茶屋の横字本有り 祐又天平宝字七

近衛屋鋪 東鋪一乘院より酒時平下凡ハ三所 斗又あり今高江の

後信基 信基の遺居ト云ハ 是文禄中 近衛左兵衛信輔

院之快忠上人の名跡を措みてよりやなり

信尹公 信尹の遺居ト云ハ 是文禄中 近衛左兵衛信輔

硯川 硯川の横字本有り 三十一日 信尹公 硯川の水を用

坊津八景 坊津の八景ト云ハ 是文禄中 近衛左兵衛信輔

西海晚鐘 西海の晚鐘ト云ハ 是文禄中 近衛左兵衛信輔

慧日催昏黒 慈雲擁宝林 鯨鐘一何寂 遥度海潮音

西の海よいろ日を送る 霞の青も赤日の車の入れの

浦浦夜雨 浦浦の夜雨ト云ハ 是文禄中 近衛左兵衛信輔

曲浦停舟 処蒼茫 烟霧寒 傷鶯蓬 底夢風 雨過前灘

中島春曉 中島の春曉ト云ハ 是文禄中 近衛左兵衛信輔

宮閣風燈 暗春林 棲鳥驚 海門帆 新設港口 棹歌聲

鶴此翁暮雪 鶴此翁の暮雪ト云ハ 是文禄中 近衛左兵衛信輔

積雲平沙 緋凝羨 連晚輝 更着多少 鶴深映 碧松花

仙人のこころも 云々 存るもし 小袖ひく 之を雪の夕々れ

龜浦帰帆 龜浦の帰帆ト云ハ 是文禄中 近衛左兵衛信輔

江村何所見 落日白 波間釣罷 秋風裡 帆舟南北還

綱代夕照 綱代の夕照ト云ハ 是文禄中 近衛左兵衛信輔

懸崖水千尺 双劍削成年 一片斜陽滿 漢歌留海天

田代落雁 田代の落雁ト云ハ 是文禄中 近衛左兵衛信輔

千里平田曠 衡陽路未元 北園傳尺素 陳影落秋風

御崎秋月 御崎の秋月ト云ハ 是文禄中 近衛左兵衛信輔

秋津雲共尽 明月大江流 風靜魚龍躍 清輝徧十洲
一絲一毫 及至收止 立不波のみさきの 秋の月影

某昔坊津は勤成ありの殆三國日噫予海濱より眺むを
届て飽きて江山不老の色を祝て日目の永くを地を
ありて造化の功人力のいづれもする事ありて奇蹟
の匠人烟稀あるのふり生誕のる種とひそく
亦るををいひ者や又幾や然も実景猶見未
其よはははははは今や昇平日久しく士人金草
の憂を忘るて時好競せす世殊あるはるるあり
とくくも吉者後田彦け地をりて皇孫を又ちひ
有りし其後其績の昆虫は被りしり知賢坊泊久
志秋月の新し後田彦を崇りて九玉神社に
て号しける皇朝衰て祀典古あはれとくく其民
は血食すくもの余の世の今もはあはれとくく
のいふは皇孫の物その大おをを和乎り
然きあの海神はあはれとくく廻りしり
ゆありりり天上よりて日神朝は後田彦子伴

て天降しむいしそが先々後田彦ハ伊勢國狭七田五十鈴之
川上ヨ文て遊り位しを史ハ始在テ天上結幽契先降深
有以美もんたり是大神より頼後田日子よそ新の勅あ
りといふは又日神の常世皇孫御偏汗可憐國と
伊勢國ハ伊勢守より白王弟主系蓋鳴尊よ三人の官姫
を信とし文て下しるは筑前國宗像ノ就しめて道
中貴と称しるハ伊勢國ハ筑前國ハ筑後國ハ筑前國ハ
本邦三箇ノ要津をぬるゆありて坊津のともさむら
後田の因縁あるハあはれとくく外敵の結縁を断り
くくの聖なるはあはれとくく土に廻りしり
そんたりま其字内を疆理し宗廟を保り
すゆ多んものあはれとくく永正十三年備中連島
の他人三字和泉守國秀といふ者流東國ハ後人
来し事ありしは神の大持足利義隆よ告の
此三字の書畫を汁減しける三字ハ人の體架よ代
して他家の婦女を治さんとすよはははははは
誅笑しけり又木下大膳大夫けは官里及し流京

せしれをかせ回六本朽るを 終馬のり又相継り
徳師の時明の質人常國管の中常國料理留演は
入はせしり及文録年中流求り其常國を
指演り是より類娃那吹のり地を極く又
崎波左京尉高又流求心成の時波海のり言をい
来り君をれい道子神紀の尚久ハ勝る大漢を
勝を居られ其言サるる子の尺より二寸を
の考既よりなりと波の高記んつけ種島
は律一國送せしり名状舞の跡を
敷し大漢朱漆の大小を佩し縮緬の室紙を
を附常事官讚を果令して船角の中島は上虎落
経廻しをれり子語ありて彼者同通セする時ハ懐
中より小冊子をえおして方の内を解しける是ハ日
本語を記せしり字ありき食物好まを
るを合録しハ後取の拾させけんも梅柚を
吹さりり伴天連の撰しよといひあり後ハ肥の
七号平護送しにをををとり阿波の商人

其ハ八伴天連人の宿美として杉島の銀子を信
すのの始末新井白石の米資之矣言ふん
雨森芳洲のハハレ草も粗見たり但ヤク島
は来りしりハ誤之始末ハ種島

同郡沖小島 方角集 十載集今云硫磺島 登壇必

府西南三十一里 周囲二里餘

黒島 因昏編 作隅島 南去府四十三里 周囲三里十八町

竹島 前ハ南去府二十八里 二島今硫首嶋属ス治

段年中平清盛入道洋海流平判官康頼丹波少将成経後
寛僧都三人於此島 平家物語云作鬼界 鬼界ハ大 五島
七島とて島の数十二より端五島ハ日本よ送元り康
頼法師ハ五島の内十戸の島曰白不島ハ丹波少将成
経さて後寛僧都ハ夷七島の内三泊の小孫黄島島
亦属島の磁黄島一名島島とて七島の磁黄島今
流

のそ君よりとハス〜

熊野権現 平富孫子生経鹿乳熊野の社に法つけれ結
散供々々名つ糸文ありて法あや多神印や紋り
けささぬとよ尾上の凡ハ列々まよ多の秋の山荒
いこく身と保む心記して養サカシ上帝鹿の言もたれ人
を忘るかといと抱哀こける子岩吹風ハ清んて木
のそ丸とて散散りたりを中よいとあや〜記流金
とそ多ハ一序二人とそ多をりけ一取そ見とハ一そ
のそあり
百子振神と神の怒あけれハあや〜おとよ 海ぶさろくま
千歳ハか〜沖の小島うとれありと祝ハ言〜ハそのこと
俊寛僧都墓 足指石あり 源平書記ハ俊寛をハ
室のよん筑紫の國まで別ゆりし〜成去ちり人柱〜あ
〜らん〜平兵衛時子と船の勢〜ハ〜おろりあり
廣府本の上月川の下流海に入ぬ〜と 旧名玉の湊
といふり俊寛僧都死の時は港より船〜築り加〜

同郡七島

今其橋を俊寛橋と呼り即今の若字八幡のその〜

口島

府南六十九里 周回二里廿五丁之島帽子寄 黒瀬

九瀬

半瀬 九瀬 あり 海東伝回記ハ小川地島と云ハ

中島

府南七十三里 周回四里半 諸国記ハ中島

七ツ山

小瀬 大瀬 小山 志嶋ハ木の所雄あり

諏訪瀨島

府南八十里 周回三里廿町 中島より七

記

飯訪島 切石瀬 壱ヶ崎 小凝之浦ハの

臥蛇島

府南八十二里 周回一里半 飯訪瀨西十里

諸国記

掛蛇島 清注 楫便 琉球 銀 臥蛇島ハ十二里

又外蛇

化ハ前三神 後立神のハ小海あり 所屬

小臥蛇

島 回六丁 法回記 作小地島 又小掛蛇

平島

府南八十六里 周回三十二町 飯訪瀨ハ南五

又外蛇

島 回六丁 法回記 作小地島 又小掛蛇

八戸 諸國記多伊羅或平羅也伊前洲 洲尾 三洲
の沙あり

悪石島 府南八十七里 周回二里二町 諏訪洲より

記 悪石 隼子洲木の砂礁あり 節洲 苜洲 難洲

寶島 府南百五里 周回二里二十町 悪石より十八里
諸國記 渡加羅 所屬二島 平島より二十二里

回廿七町 諸國記 作島子 沖障の沙あり 又西南

より五島上子島 回廿所 又下子島 回 町 大離の沙あり

あり 寶島を去共十二里 今案 汪楫 琉球録曰七

島者云云 人不満 乃惟宝島較大 國人統呼之曰土

嗜刺或曰兩倭也 然一國人甚諱之 殊不知有日本者

琉球國志畧云 一說七島本國屬尚寧王被襲 言

地与文王乃歸 帛七島也 是此七島 蓋古者 峴

峴國所屬耳 後川邊郡 又案南島人七島を

總稱して度加羅と云ふ 寶島の謂也 必古語

未と指して換致と云ふ 南の互に其地

と近き方をとさして島の佐名とす 其のあり又

統紀 所謂 度感音 度加羅 近一或也 八宝島 尚

時を島と云ふ 隼子洲 亦云 宝島 ともを 度加羅

と呼ぶ 子手 亦云 隼子洲 亦云 宝島 ともを 度加羅

穎娃郡 穎娃郷 和名 鈔 穎娃 延乃

開闢山 林三仙 田村 西南 根 蒼海 距 長崎 浦 半里 許 峯

頂 曰く 不二山 又 數ヶ山 上 常 葱 白 雲 一名 空 蕪

島 清和 天皇 貞 觀 十 六 年 甲 午 山 頂 大 炎 上 為 虛

洞 故 名 馬 嘗 比 山 乃 曰 因 を 按 じ 先 是 絶 頂 峭 尖 矣

上の 時 燒 崩 して 國 頂 と あり

三代 實 録 貞 觀 十 六 年 秋 七 月 丁 亥 朔 二 日 戊 子 地

震 太 宰 府 言 薩 十 國 從 四 位 上 開 闢 神 山 頂 有 火 白

燒 烟 薰 滿 天 灰 沙 如 姑 雨 震 動 之 音 聞 百 余 里 近 社

百 姓 震 恐 失 情 云 勅 奉 封 二 千 戶 案 穎 娃 郡 山 川

知 賢 麻 笈 の 法 々 古 開 闢 神 戶 の 事 旧 史 よ 見 たり

和 元 年 十 月 九 日 庚 申 先 是 太 宰 府 言 上 管 肥 前 國

自 六 月 澍 雨 不 降 七 月 十 一 日 國 司 奉 幣 詣 神 延 傳 十

三日夜陰雲晦合間如雨声 遲明見雨於土屑沙交
下境内水降田苗稼草木枝葉皆悉集枯俄然降
雨洗去塵沙枯苗更生薩广国言同月十二日夜晦冥
衆星不見砂石如雨檢之故實穎娃郡正四位下開聞
神奈怒之時有如此事 国寧潔齊而沙乃止八月十
一日震声如雷燒炎甚熾雨沙滿地晝而枕夜十
二日白辰至子雷電砂降未止砂石積地或高一尺
以下或五六寸以上田野埋瘞人民騷動以下畧案
是亦高十德峯櫻島山炎上の状と彷彿相類す
予開聞山燒却火変又係る所より收裁す

文録中 近浙信輔公 け岳を眺みし
後天のふみのうらみ 日本紀作海神宮一宮記綿積宮
枚聞神社延喜式 日本紀作海神宮一宮記綿積宮
渡海 作用聞今信徒之和漢三才圖今作

奉祀 豊玉彦夫妻 一宮記猿田彦未詳
東宮 彦火之出見 姉姫宮 豊玉姫

塩老翁邑地の
塩屋村の
川尻村の
を其村中
豊公役皇孫と
魚して以今
社若年塩
のし又せ其
村も其
を塩老翁の
之向方俗所
塩公取
今案塩

府南十五里在開聞山之北一里許
日本記曰塩土老翁内彦火、出見尊於菟中沈之
干海云、念至海神豊玉彦之言
梅又由去海を以て神を今の沖繩に豊玉彦八郎海島の高老と
詳し南を考ふ出せり塩土老翁ハ老華有徳の人而枚や平らけく
予のその語即老翁の邑地也といはけ所名あり始て探出見尊と
土老翁の語よりて位を南をいひて塩の豊玉彦立乃忠功をりて再
旧都を振發し豊玉彦ハ
姫ハ神皇正統記の皇紀 豊玉彦老翁ハ下をけし記ありあり
を塩を教ひ其礼を隆 蓋神武登極の後敷封ありあり
ある 又曰説ハ并耳神ハ豊玉彦其山陵と
るもの今 又曰説ハ并耳神ハ豊玉彦其山陵と
天智の倭妻と け祠のまといの説あり其言不徑の
きもの之所謂其録記ハ天智倭妻者始開聞社僧瑞志
院主登山修密法時有祀床未嘗其法水遂有身他日復来自

聖宮 塩土老翁 正上宮 玉依姫
廻殿 天照太神月夜見尊
荒仁宮 大己貴 西宮 天智天皇及妃

曰產一女容姿端正院主携養之方長調撥入于宮中帝寔日渥宮
姬嬖妬欲逐之或者詰之曰嬖妾則本庶子其足乃庶蹄極極
蔽之倘使彼露醜之必不堪念辱自出去于適雪中謀誘度前
為雪國嬖妾不得已出而共焉其足跡果見庶蹄痕耳嬖妾太
慙愧之即出宮而大歸于本鄉帝惡莫追而采于此正有居焉今細
細繹是鄙俗則日本記所謂天孫取海神女豐玉妃既而有身姬
方產化為童妃深懷慙恨而往于海御天孫思戀之為鬼着
島之歌贈于妃亦為之奉報歌之後世鄙野人慣乎古典曰史倍傳之
化以豐玉妃為嬖妾之事以天孫為天智又錄記謂當時修密法瑞庇
院主至今主僧三十世矣夫天地帝至今既十有餘歲矣其主
代序宣止僅三十世而可哉况天智時未有瑞庇院者甚在謬
知而已蓋浮屠氏設之說立異現怪皆是之類あり夫天智
中興英主在為注奔通逃之首可深嘆夫由之天智帝九
別子孫落の況はあり今又其跡を垂て附記ある
のあり是天智の繼體大友天皇敗績の餘兵此地不
適來りしを遷村あるといふなり天智帝八十年
辛未歲十二月三日乙丑崩于近江宮通澄引水鏡所記云
天皇幸山科而不歸有遺復作陵于此者誤傳音羽山

行曆居士事也詳元皇系書云々天智の薩廣あり源流し
のりさるるの明あり

延喜式神名帳曰薩廣國額娃郡一畦小枝間神社
三代實録貞觀二年三月廿日庚午薩廣國從五位
上開聞神加從四位下 同八年四月七日辛巳授
薩廣國從四位下開聞神從四位上

凡南島の本種より來りてその海上先始て山を足り
船中必湯を酌て遠く枝を神を中を參り蓋古者南島
枚の神豐玉の部下に傳ふありけり俗あり

玉井 元ノ神社の地林あり石韓四周あり石多井あり
日本記曰彦火と出見と到神豐玉と立彦之宮に
世之門外有井之有一美人自内而出持以玉也

汲玉水 形田く鏡と似たり 近衛信輔云
鏡池 薩廣より後の池のひよあしとの決めと友も足るらん

海子深牧聞山記曰夫枚聞山者薩之名山而在穎娃
郡去府凡百里余紳縉家目其山曰空樓島有筑紫富
士之詠以與駿列富士相似也山之正北二里許有廟
號枚聞神社又名海神宮祀豐玉彥豐玉姬等之神
以彥火三出見尊配祀焉俗誤傳祀天智帝及愛妾比出
淳屠氏附會廟藏酒二甕謂之千年酒年々如釀不已
故得永存也傳言竟宮獻之蓋純宮琉球也古豐玉彥
海島酋長故南荒諸夷屬其部下獻之固是也愚者以
龍宮力水府何誕也而其一甕有破痕當時獻而失墜
諸地補之得全其如云破甕坂在山川地又廟側有寺
曰瑞應院掌廟事且有玉井及宮地等之遺跡初出見
尊逼兄火用命之由命也去蒙座海宮豐玉彥傾心事
之遂獻女豐玉氏居三歲而後還都乃嘆而詠鳥着島
之歌於是年南土思其德建廟祭之蓋宮地者天孫出
見之宮趾玉井即宮中井也山之東麓十餘里有山川
港萃壘互市之航船所輻輳也山判壘高嶺鳴鶴子遊
之於是其有客飄拳者甘名山謂余曰枚聞當獻山川港

豈堪空仰望寧共摩頂乃以八月之望黎明發舍行望
則表乎突兀形如履碗卓乎筆筆勢力摩天衢提推鎮
岫匍匐攀紆翠屏垂頭薜蘿塞途仰窺幽岫則白雲繞
睡練乎如帶紛如佩瑤身效棖榛心擬黃鶴朝翔雲霄
魚綠峭崿如此者半日程始出絕頂有萃表小石祠祭
岳神焉頂上方可丑十餘耳山脊往々兀然露出雜樹
以救渴唯八分以上氣候如洹寒天人宜杖縵而石拳
目則白日與我齊俯耳則驚凡履下聞天都渺遠豈羨
鼎湖雲仙境杜近何間子喬群西南臨則眺觀洋瀛之
際卓尔煙帽雲冠者疏黃益收開雙闕也若觀若鵬目
擊眸屬者多襍子敷垂而翼也倚々如篁縵々如馬連
逶迤岨岨星布甚躋辛奇闕異羅列於數百里間者
竹島黑崎臥蛇思石土噶喇諸島也暨其幽遐寥廓則
有鬼界度感奄美惠羅去此千里又有中繩八重諸國
皆旁午于南溟中地羈東北顧則山脚踞然踞穎姓山
川近入目睫者為池田湖方十里周袤三十餘里其土
民有言曰湖有神龜諱不潔故水面未嘗有一芥時有

黃雲蒼鳥古右將軍之名駿池生者佃沐賦出於此云
胡詠遠窮左脚則大海湧而入北地者二百餘里薩陽
二外吞之其形如葫蘆其名曰潮汐池景之仙島十六佐多
岬南走斗而遠入海若鳥張翅視衆山之良則蔚平簇
之若堆阜与培墟痕馬浦綿若菜畦兼龍臥金峯朝我
綠翠堪拾字字椰窠遙對香烟可揖爾乃野馬蹴海高
熊負岬鳥帽欲落地王垂鬚冠嶽正立紫尾駒走法草
如芙蓉露島如香炉四時而白雪居心畧意給有不可收
八葉而丹崖或四時而白雪居心畧意給有不可收
者此施德九別上下昭明黎民變雍不識不知順帝之
于此施德九別上下昭明黎民變雍不識不知順帝之
則鳴乎山之為靈蹤也尚矣哉今客飄然輕拳之人也
如莊觀智之何予雖不尺歷嘗涉二三駿之富士信
之淺間和之金峯越之白山是甲於畿甸東北之際者
也而富士居一其形其渠其高四十里足周三百餘里
上稱之鳥其外降二日程淺間金峯比之如兒孫所謂
二十日者今日唐可同年而論巨細乎而遥頭於西土近
宿之外降信之宿有石室登者以由之矣未鷄鳴時已

學于東方虽婦人小不皆莫不知其高也子豈欲似葵
卉不知有葵藿邪何其固矣鳴鶴子返巡謝曰非敢也
富岳為高山不待教而知焉枚聞有富士之号亦以形
芳佛也豈敢排之在然其容所親也吾治容耳之未聞
思之所未至者蓋山者產也產万物者也故以有生枝
為貴矣非高也今夫蓋故者隅之大山在枚聞之南
海中以所立廓郭舟路香涉拳世罕能登陟王者其由
望秩故名不顯於中國美不施於声詩土產之多無有
其材則杉檜椴椽扶桑山丹石楠豫章蒲桃蒲葵不可
勝記也而杉檜最其理杜屈行統如亂雲出岫莫烟繞
而自解不更用錐其理杜屈行統如亂雲出岫莫烟繞
嶺或為鷄羽班點雨脚露之象焉其香逾射廉暗其膏
類車轍久在水中不巧敗故造舟輕捷作橋堅牢制器
不斃力柱不蠹不滯不山白如雕画而吾國板屋之用
常有餘裕茶草則裁木黃連緒沙是為最矣其間就中
危產為硯石出海嶽之嶺氣堅顯其色純漆塗踰
紅絲龍尾岬不曰高乎絕頂幾万仞星峯重嶺行程
宿之外降信之宿有石室登者以由之矣未鷄鳴時已

見日出云林扉而登唯瞻一峯進上一峯障一峯乃至第一
二峯始得見第一峯海上望者離麓八十里而終見第一
二峯其最頂則匿類於七雲倒景於重瀆直摩蒼苔勢
厭水都地翳其名勝云花江川蓋仙境也其湖方十里
水清一淺渚午昏綠沒甲白石鄰靜鑑温奇木吳
艸蕃衍乎其旁乃有桃葉珊瑚石楠扶桑九節菖蒲
荃木芝朮翻黃花散金春風搖湖暮雲捲雨丹楓翻霜
昔松落雲一境之內四時之景有不可言者殆免翳荒
或宿此夜半恍惚有金鷄鳴嘶或時聞霓裳之妙曲
山足之周則向四百里部落數十人戶數千祀觀史
迂之言曰天下名山八而三在重夷五在中國其一豈
得非益救乎且夫彼四十里削成之高孰与扶木衆多
世受其利生々相濟綿連東北周回廣遠若居民居殷
富採山釣水鮮美可食唯其所少者在幽遐遠境名不
不顯耳其音澤則暗泱洽中州矣予所謂名山者又非
是之謂也虽小山也不剛缺不腫不矢为灵跃正是
已矣古人曰山不在高有仙則名水不在深有龍則灵
况枚聞者帝皇行遊衍化之地而其为灵非者仙龍之

類也豈可啻以山之高大为夸乎容迥尔而然然有若
笑燕雀者文見者之状於是不覺勞漸至山足步明月
而歸山川卷之云

同郡同鄉別府村

堀河院百首

水成川能因歌枕
顯林黑鈔ノ在リ

いんげんもはなやれいんげんもはなやれ人の心とほる

甄島郡 和名鈔甄島

甄島 統日本紀

大日本史作

甄島郡古之木文萬 甄島子敷 甄島諸国記日本
国本因甄島武備志作天堂 上甄中甄下甄三岨
甄島統呼甄島但中甄屬上甄 今案唐唇有波邪
小王云々打謂波邪疑云此島乎統記甄年人あり
波邪八隼人の批多へ

一名 冲津島

歌書ノあり

府西廿二里

京泊道 周西

三十五里

上甄里村

下甄年打村

中甄年打村

平ノリ 里村

よきナリしかせ田部間村より午打村まで十八の港
三日午打村日中甌村日小島村入海あり一記は許
風京多し上甌ハ中甌村を以て村とあり古者甌集人
不居処是あり下甌ハ午打村を以て村人居る
漢戸数百區

瀬ノ浦 下甌ノあり有高山西辺海畔奇不同法合
抱立列島中の傍京あり今案海を法固
記し世に九浦の岫と云ふもの即け浦名をとりて呼ぶ

統記 孝謙天皇神護慶雲三年十一月庚寅天皇
臨軒云々薩廣正六位上甌集人麻比古授上正六
位上薩廣同記宝龜九年十一月壬子遣唐第四船
刺泊薩廣國甌島郡其判官海上真人三持漂着耽
羅島被島人畧留但録事韓國連源等陰謀解纜而
去率遺衆四十餘人而未歸
大日本史外傳上 日宝龜九年滋野奏狀至京即勅

太宰府迎勞唐使促滋野速入于京十一月第一船
海中遇風船破津守國磨及唐使判官等五十六人
乘其艘漂至薩廣甌島樞相同史卷六後二條天
皇正安三年十二月十一日丙子前相模守北條貞
時奏元兵寇薩廣子數島記

異稱日本傳見林曰嘗聞藤原長記曰正安三
年十二月十日異國賊船來于薩廣國子數者一
艘凡海上船可三百艘此為寧一山後事而元史
不見蓋世祖困於我二十三年罷征日本遂死
而後已成宗繼立使一山而一山不歸故淳巨鑑
候我動靜云云今案胡元世祖欲加兵於本
邦無聊我生民將范文虎等率師十萬入寇城
多港為神凡所覆奉軍盡沒得歸者三人耳曰于
閻腕曰莫青曰吳万五世祖憤心猶不息以我俗
好淳屠故欲因其嗜好而間之乃使僧寧一山者
頌加妙慈弘濟大師号附商船送遣本邦強覘
我文虛實實伏見天皇正安元年副元師北條

貞時激怒詩伊豆國時或稱揚寧道譽貞時素信
禪說延主巨福寺文保元年十月遷化于此
特遣前大納言源有房祭之其文畧曰不留幻質
墮此偉人若亡良弼思慕罔罄噫寧一胡元之奸
傾為我之登賊陽表誠懇陰懷福心覲面目欺侮
我人枕三歲兒飽食國粟優沐共慈卒到于瞑目
未嘗曰我本是胡元間諜還而來于本邦以一
言懺悔之也其隱惡甚匿如何耶當時向黨其所
僻不止愛生前又從而追責幽魂噫寧之幽魂抱
然此乎地下之類乎抑迫雨竊笑我之被欺乎噫
亦世之以才伎藝夸毗子人過蒙拔擢頭揚者惡
知不出寧一之同口乎

薩广國名所未考

加也一影一和力小乃子
右出能自新秋近考去居一

以上薩广國終

